

『表現学』第五号（平成三年三月五日）抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

餅焼きの比喩

—三島由紀夫と司馬遼太郎—

徳永直彰

餅焼きの比喻——三島由紀夫と司馬遼太郎

徳永直彰

はじめに

三島由紀夫が陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自決（正確には同志の介錯による死）した翌日、司馬遼太郎は「異常な三島事件に接して——文学論的なその死」という一文を発表している（昭和四十五（一九七〇）年十一月二十六日「毎日新聞」(1)）。ここで司馬は、日本政治思想における《一種の充実》として吉田松陰の刑死を引き合いに出しつつ、三島の死はそれと一見似てはいるが実質は《有島武郎、芥川龍之介、太宰治とおなじ系列》の、《文学論のカテゴリーにのみとどめられるべきもの》であるとし、両者の区分を強調し、その上で、松陰の死が「思想」——たとえば幕末の志士が多く抱っていた陽明学——の実践による死だとすれば、三島の死は「思想」ではなく「美」への傾倒によるものであり、《美という天上のものと政治という地上のものを一つのものにする衝動を間断なくつづけていたために》起つたと述べている。自死にさいし三島が自衛隊法制化や天皇の荣誉大権復活を訴え、かつ、二・二六事件の余波で自決する軍人夫婦を描いた『憂国』（昭和三十六（一九六二）年）を《中尉夫妻は、悲境のうちに、自ら知らずして、生の最高の瞬間をとらへ、至福の死を死ぬ》(2)、《私のすべてがこめられてゐる》(3)、《ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福である》(4)と自作解題していることなどを勘案すれば、三島が美と政治を繋ぐとしたという司馬の指摘は妥当といつていい。

題名にある「異常」という語や、事件翌日に発表という即応性からは、冷静沈着のイメージが強い司馬らしからぬ違和感や嫌悪感がうかがえる。三島・司馬を比較した

先行研究である松本健一『三島由紀夫と司馬遼太郎』(5)ならびに山内由起人『三島由紀夫 vs 司馬遼太郎』(6)は、司馬がこの一文冒頭で《この死に接して精神異常者が異常を發し、かれの死の薄よこれた模倣をするのではないかということをおそれ、ただそれだけの理由のために書く》と述べている部分を取り上げ、三島の死じたいが「精神異常者が異常を發し」たようなものであると読まれることを司馬は意図していたのではないか（松本）、あるいは、司馬の生理的嫌悪感がなまなましく出てしまったのではないか（山内）と考察している。この両者の解釈が妥当であることは、三島が武士道への傾倒やその背景となる思想について記したいくつかのエッセイのうちの一つ「われら」からの遁走(7)の中で《文士が政治的行動の誘惑に足をすくはれる》ときの危うさに触れた《中年の文士の犯す危険は、大てい薄汚れた茶番劇に決つてゐる》という表現と、「薄よこれた模倣」という司馬の言い回しが酷似していることから分かる。司馬は三島の「われら」からの遁走」を読んでおり、意図的であるかあるいは無意識のうちに、三島の自戒をそのまま間接的な三島批判の評言として用いたのだろう。三島の市ヶ谷における行動は、三島が深い想いを抱いていた二・二六事件の模倣としても捉えることができ、三島は自戒していた「茶番」＝「模倣」を演じてしまったのだという司馬の真意を読みとれることもできる。

この司馬の三島批判と大きく関連するが、松本・山内もその論考の前提として、両作家がほとんど比較されてこなかったことを強調する。三島が古典主義者・ロマン主義者であるとするなら司馬は近代合理主義者であること、文芸作家としての足場も純文学と大衆文学という違いがあることなどをその理由として挙げ、しかしながら両作家の作品と思想には通底も見えてとれるとし、その比較考察に進んでいく。たとえば松

本は、司馬も六十年代までは武士の美意識のようなもの、いわばロマン主義的な人物像を『燃えよ剣』(昭和三十九—一九六四年)／新選組副長・土方歳三が主人公や『峠』(昭和四十三—一九六八年)／長岡藩家老・河井継之助が主人公で描いていたが、極力事実に忠実な歴史小説を書くようになっていったきっかけが三島の自決だったのではないかとしている。その関連で、鶴見俊輔との対談における司馬の発言(『ぼくは五・一五や二・二六事件は非常にきらいです。あの連中に迷惑をこうむったのは、われわれ庶民——、ゲタ屋のおやじであり、フロ屋のおやじであるわけで、その怨念が猛烈にある。』(『朝日ジャーナル』昭和四十六—一九七二年一月一日合併号)『特集・狂気と社会』(8)／三島事件直後の時期であり、明らかにそれを意識した特集を組んでいる)——を挙げ、五・一五事件と二・二六事件への批判に仮託した三島事件への批判を読み取っている。山内も時代劇映画『人斬り』(昭和四十四—一九六九年、監督Ⅱ五社英雄)Ⅱ司馬の『人斬り以蔵』(昭和二十九—一九六四年)を原作に準ずる参考作品とし、三島は田中新兵衛の役で出演 に関する比較考察を通じ、両者の共通点を探っている。また、時代的には二十年強のブランクがあるが、三島・司馬それぞれの晩年における日本社会ならびに日本人への不信にも相通するものがある——三島は対米追従と伝統破壊、司馬は土地投機による自然破壊がその核にあるが、日本社会および日本人への強い不信と憤りは共通している——と松本・山内は強調する。

松本・山内は、三島の死に接した司馬に批判的姿勢のみをみるが、三島自決に接した司馬の中には、三島に対する負の感情だけでなく、共感めいたものも含まれていたのではないかと論者(徳永)は考えている。司馬は先に挙げた三島事件評で吉田松陰の刑死を「一種の充実」という慎重な言い回しで表現し、さらに《そういうたぐいの精神(引用者注Ⅱ松陰のような精神)は民族のながい歴史のなかで松陰ひとりではなくさん》であるとしている。司馬が松陰を全面的に肯定しているわけではないことを示しているが(それは司馬が松陰を描いた『世に棲む日々』(昭和四十五—一九七〇年)からも読みとれる)、このことは、三島への違和感・批判もまた全面的でないことを示しているのではないかと。前述のように、松陰の死と三島の死を政治・思想／文学・美の二分法で峻別しようとする発想に、力づくの強引さが潜んではいるだろうか。

また、松本・山内の論考は、上記三島事件に対する司馬の反応以外、両者の直接的な影響関係に対して言及していない(前述のように山内が詳細な分析を施している映画『人斬り』は、三島と司馬が最も深く関わった作品といえるが、この映画に関して

も両作家がお互いに言及した記録がないので、山内も当然のことながら直接の影響関係は見えていない)。

本論は、上記松本・山内の優れた先行研究をふまえて、司馬が三島に影響を与えていた可能性について考察することと、司馬が三島に対し上記のような反応をしたことの意味を再考することを目的とするものである。

一、三島由紀夫の司馬遼太郎評価——安岡正篤への書簡

左翼学者でも、丸山真男の如き、自ら荻生徂徠を気取って、徂徠字ばかり祖述し、近世日本の政治思想の中でも、陽明学は半頁の commentary で片付けてゐるかの如きは、もつとも「非科学的」態度と存じます。

却つて大衆作家の司馬遼太郎などにまじめな研究態度が見え、心強く思つてをります。

(三島由紀夫書簡 安岡正篤宛)——昭和四十三年(一九六八)五月二十六日(9)

安岡正篤は陽明学研究を専門とする保守思想家で、北一輝や西田税(ともに二・二六事件首謀者とされ、刑死)、大川周明(北、西田らと同じく昭和維新論者)など交流があり、戦前戦中戦後を通じ政財界に強い影響力を持っていた人物である(元号「平成」の発案者であったという説もあるが、昭和から平成への改元時に安岡は故人なので、故人の案は採用されないという元号制定の規則に反する。だが、発案者だったという逸話が生じるほどの立場にいたことは間違いない)。上記引用の書簡は、三島と親しかった教育学者・伊沢甲子磨を介して陽明学関連の著書を安岡が贈ったことに対する礼状である(『三島由紀夫書簡』所収三島の蔵書目録には安岡の『王陽明研究(新説)』『興亡秘話』『講演 古今に学ぶ——日本の盛衰』などがみられる(10)。上記書簡の引用部分直前、三島は陽明学の中心思想といえる「知行合一」に言及しており、自決にいたる政治行動への志向に陽明学が与えた影響を物語る。(また、丸山真男批判の件りなどは三島が陽明学を論じた代表的評論「革命哲学としての陽明学」(昭和四十五年(一九六九年)九月)にほぼそのまま転用されている。(11))

この書簡からは、少なくとも三島が司馬の書いたものや発言に目を通していたことを物語っている。(却つて大衆作家の『』という三島の言い回しからは、純文学と大衆文学の区分や序列意識も読みとれ、三島から司馬への言及が公にされなかった背景も見

てとれる。しかし前述のように、司馬の『人斬り以蔵』を参考作品とする映画『人斬り』に出演したりもした三島であれば、司馬の作品や評論を読んでいると考えるのがむしろ自然だろう。

「では訊かう。飯沼、お前の理想とするところは何か」

(中略)

「昭和の神風連を興すことです」

勲は、崩せと云はれても正座のままの、制服の胸を張つて簡潔に答へた。

「神風連の一举は失敗したが、あれでもいいのか」

「あれは失敗ではありません」

「さうか。では、お前の信念は何か」

「剣です」

(三島由紀夫『奔馬』十一／『新潮』連載は昭和四十二(一九六七)年、翌年八月(12)

「総司、見てくれ。これは刀である」

「刀ですね」

仕方なく、微笑した。

「刀とは、工匠が、人を斬る目的のためにのみ作ったものだ。刀の性分、目的というの、単純明快なものだ。兵書と同じく、敵を破る、という思想だけのものではない」

「はあ」

「しかし見ろ、この単純の美しさを。刀は、刀は美人よりも美しい。美人は見えても心はひきしまらぬが、刀のうつくしきは、肅然として男子の鉄腸をひきしめる。目的は単純であるべきである。思想は単純であるべきである。新選組は節義のみに生きるべきである」

「司馬達太郎『燃えよ剣』——『大喧嘩』」

／『週刊文春』連載は昭和二十八(一九六三)年十一月〜翌年三月まで(13)

前掲山内も両作の上記部分を挙げ、その相似を強調している。松本も『燃えよ剣』の別の箇所「私は百姓の出だが、これでも武士として、武士らしく死のうと思つていゝ。世の移り変わりとはあまり縁のねえ人間のようにだ」(『菊章旗』)、「時勢などは問題ではない。勝敗も論外である。男は、自分が考えている美しさのために殉すべきだ」

(『秋別』)という土方蔵三の台詞を挙げ、三島のそれに通じるロマン主義的精神や武士的美意識を読みとつている。(たしかに上記土方の考え方は『奔馬』の勲が「もつとも望むこと」が『昇る日輪を揮しながら(中略)自刃すること』であることと通底する。)

ただし前述のように、山内も松本も、両者・両作を併記し、その相似を読みとるとどまつている。が、上記引用における勲と土方の「剣」——「刀」に対する強い想いはまったく同じといつてよく、先に挙げた安岡正篤宛て書簡中の司馬評価ならびに両作の発表年に鑑みれば、司馬から三島への影響を読みとることもできるのではないかと論者(徳水)は考えている。

このことと関連して考察の鍵となるのは、三島の新選組への関心である。「天皇陛下万歳」と叫んで自決した三島であれば、戊辰戦争において徳川幕府側に属し、やがて賊軍として滅びる新選組が共感の対象となりにくいのは当然であろう。実際、三島が共感を表明し、『憂国』『英霊の声』『奔馬』などの作品にも取り入れていたのは熊本神風連(二・二六事件の青年将校、第二次大戦における神風特別攻撃隊の特攻兵たち)さらには最晩年にはエッセイで西郷隆盛への共感も表明している(14)など、強烈な天皇信仰と結びついた人々であり、公の場での新選組への言及は、映画『切腹』(昭和二十七年一九六二年、監督小林正樹)の映画評として書かれた中の、下記のものしかない。

もちろん竹光の切腹(引用者注)この映画で描かれる博多は異例であり、映画はその設定の残酷さに集中して、そこに主題の顕現を賭けたわけであるが、真刀の切腹だつて実際はもつと凄惨なものであり、新選組の度重なる切腹は、わづか百年前、女子供の目にも触れたのであつた。

(三島由紀夫『残酷美について』(昭和二十八)一九六三年八月)(15)

三島が切腹に並々ならぬ関心をいだき、やがて実行することを想起すれば、上記引用は重要な記述ともいえる。この文章が、新選組が出てこない映画『切腹』(舞台は江戸時代初期にあたる寛永年間)評の中で言及であることも本論としては着目するが、いずれにせよ三島が前述の共感対象たる志士や兵士たちを評した発言や文章の質量に比し、新選組への言及は微々たるものである。たとえば前掲『奔馬』でも、主人公・勲が私淑するのは神風連の志士たちであり、自分たちの信念を「剣」だと即答する描写も、神風連が銃火器を忌み剣(日本刀)を神聖視していたことと通じている。

また、『燃えよ剣』で司馬が描く土方は、司馬らしい合理主義的思考の持ち主でもあるように描かれており——司馬の新選組作品発表以降飛躍的に進んだ新選組研究においても、史実の土方が戦鬪者として高い合理性を備えていたことが明らかになっている——、剣への強い思いに象徴される武士道の完遂をめざす美意識と、敵に勝つという原理にひたすら忠実な戦鬪者の合理精神とを併せ持つ矛盾を抱えている。

司馬は戊辰戦争における官軍側といわゆる薩長土肥の志士たち（坂本龍馬、吉田松陰、高杉晋作、大村益次郎、西郷隆盛など）も数多く描いたが、三島の『奔馬』に通ずる死を前提とした武士的美意識のようなものを司馬が彼らに持たせることは比較的小なく（でなければ松陰のそのように美意識というより妄念であるような描出にとどまり）、それはむしろ賊軍側の土方や、下記引用『峠』の河井継之助に託されている。

「人間のいのちなんざ、使うときに使わねば意味がない」という旨のことを藩主にいうでもなく、つぶやいた。

「たゞとて殿さまといえども一個の男子であり男子として考えて差し上げねばならぬ。こんにも殿さまは義侠によつて上落あそばす。このとき御病氣なるがゆえにお控えなされたとすれば、あと百年のお命があったとしてもそれは無駄というものだ。いま徳川家は危機に瀕しておる。三河以来の譜代におわす牧野家の御当主としては、このとき敵地へ乗りこみ陳弁せねばなんのためにの譜代であろう。世々七万四千石の御禄をいただいていたのは、この一日のためにある。男子とはそういう一日を感じうる者を言つのだ」

『峠』——『藩旗』

／「毎日新聞」連載は昭和四十一（一九六〇）年十一月、昭和四十三（一九六八）年五月まで（16）歴史は百年たてば鎮まるであろう。その百年の後生に正邪の判断をまかせるためである。というのが、東洋の価値観であった。その百年のちの理解をまかせて、いまはただ玉碎せんのみ、というのである。全藩戦死することによってその正義がどこにあるかを後世にしらしめたいという。

——あれが継サの陽明好みだ。と、ひそかに陰口をいう者もあつた。陽明の徒は万策尽きたときにすべての方略をすてその精神を詩化しようとするところがある。継之助は詩へ飛躍した。

『峠』——『騷起』

（前略）継之助は、この戦争の意義について考えつづけた。

——美にはなる。

ということであつた。人間、成敗（成功不成功）の計算をかきねつづけてついに行きつまつたとき、残された唯一の道として美へと昇華しなければならぬ。「美を濟（な）す」それが人間が神に迫り得る道である、と継之助はおもっている。

『峠』——『騷起』

司馬が描く土方歳三も河合継之助も、逃れられぬ死を目前に武士としての自身の美意識完遂をめざす。土方の刀への想いや河合の陽明学への傾倒など、いかにも三島好みの人物像といつていいだろう（先に並記した『奔馬』と『燃えよ剣』における刀への想いはむしろ、上記引用『峠』で河井が主君に意見する場面も三島の『英霊の声』における「などてすめろぎは人間（ひと）となりたまひし」と通感しよう）。だが三島は、土方や河合が賊軍であるのみならず——賊軍であるという意味では神風連も二・二六事件の青年将校も西郷隆盛も同じである——徳川幕府側に属し、明治維新以後確立されていく国家神道との繋がり希薄であることに鑑み、共感を表明しなかつた——より正確を期せば、隠蔽したのではないか。

二、幕臣・永井尚志——徳川勢力と三島由紀夫

三島が父方の祖母・なつ（旧姓永井）の影響を強く受けて育つたことはよく知られているが、このなつは、徳川幕府最後の若年寄・永井尚志（なおゆき／なおむね、とも。官位は主水正、玄蕃頭）の孫にあたる（尚志の養子・尚直の子がなつ）。三島はこの永井尚志に関し、いくつかの言及を残している。なかでも、前掲山内が指摘する、映画『人斬り』出演における奇縁が興味深い。

『人斬り』で三島が演じた田中新兵衛は姉小路公暗殺の嫌疑をかけられ（その真偽は不詳）取り調べのさいに突如割腹自決するのだが、史実では、この取り調べをおこなったのが当時京都町奉行を務めていた永井尚志だったという（映画では京都所司代による取り調べに変更されている）。三島はこの奇縁をよるこんでいたようで、林房雄——『大東亜戦争肯定論』（昭和四十一一九六五年）のほか、若き日の伊藤博文（俊輔）・井上馨（剛多）を描く『青年』（昭和九二一九三四年）、『西郷隆盛』（昭和二十二一九四八年）など、幕末小説でも知られる——あての書簡で『新兵衛が腹を切ったおかげで、不注意の咎で閉門を命ぜられた永井主水正の曾々孫が百年後、その新兵衛

をやるのですから、先祖は墓の下で、目を白黒させてゐることでせう(昭和四十四(一九六九)年六月十三日付)と書いている(17)。

それに先立つ昭和三十五(一九六〇)年七月一日におこなわれた「永井尚志七十年忌」の法要にも三島は出席し(18)、昭和四十三(一九六八)年一月十八日のドナルド・キーン宛書簡でも自身を「曾々祖父永井玄蕃頭と同じ反革命の立場」としている(19)。ここで三島がいう「反革命」が当時囁かれていた共産主義勢力による間接侵略に対抗する自分の立場を指しているのは明らかだが、永井の立場についてどのように考えていたのかは、その解釈が少々難しい。山内は、永井が徳川幕府にあって大政奉還にも功績のあつた開明的な家臣であり、日本の新国家建設をめざしていたという点では薩摩長州を中心とする官軍側と同じであるから「反革命」である、と三島が考えていたのだからと推測している。たしかに幕末の佐幕派と倒幕派はいわゆる右翼・左翼と異なる側面があり、特に尊皇思想は実は佐幕派にも共有されていたこと(後述)に鑑みると、こと天皇信仰にのみ限つていうならば当時の武士・志士とよばれた人々はみな「反革命」といつてもいい。しかし論者(徳永)は、三島がそのように考えていたとすれば——永井が自分(三島)と同じような天皇信仰を持っていたと三島が考えていたとすれば、永井への共感をもつと公にしてもよかつたのではないかと思う。そもそも三島は、江戸時代末期の佐幕派勢力に尊皇思想が共有されていたと認識していたかどうか。現在の歴史認識においても、佐幕派勢力と尊皇思想を結びつける捉えかたはあまり一般的といえず、専門の研究者や幕末史に精通する歴史作家が指摘する程度にとどまっている。これらを勘案すると、上記キーンへの書簡にみられる「反革命」とは、永井が末期徳川幕府の重臣だったことをふまえた「体制を覆そうとする勢力に対抗する立場」という単純な意味にとどまるのではないだろうか。

司馬遼太郎は永井尚志について作中で多く触れ、その開明的精神を好評価していることもうかがえるが、特に中心人物として描いてはいない。が永井は、司馬の作品歴史にとつて重要な人物たち——坂本龍馬、近藤勇、土方歳三と深く関わっている。坂本龍馬に対しては、大政奉還の画策から実践にいたるまでの伴走者あるいは庇護者のような存在であり、新選組局長・近藤勇とは、第二次長州征伐のあと共に広島に向かい、長州との戦後交渉をおこなっている。土方歳三とは、榎本武揚ら旧幕臣と共に函館(當時は箱館)五稜郭を拠点に蝦夷共和国で共闘した。

三島が司馬の『龍馬がゆく』(※司馬は意図的に「龍馬」の表記を変えている)や『燃

えよ剣』『新選組血風録』などを読んでいたという確証はない。『三島由紀夫書誌』(20)の三島蔵書目録には編集の基本方針として同書出版当時存命する文芸作家の本が含まれていないので、当然司馬の本は含まれていない。しかし、映画『人斬り』出演にさいし『人斬り以蔵』を読んだことは想像に難くなく、また、新選組研究の基本文献といえる子母澤寛『新選組始末記』(昭和三(一九二八)年、万里閣書房)三島所蔵本は昭和三十(一九五五)年の鱒書房刊、『新選組物語』(昭和六(一九三二)年、春陽堂)三島所蔵本は昭和三十(一九五五)年の鱒書房刊)の書名が上記蔵書目録にみられることは、三島が司馬の新選組小説も読んでいた可能性を示唆する。このことと関連して、先に挙げた、三島が公の場で唯一新選組について記述した『残酷美について』という文章が発表されたのが昭和三十八(一九六三)年八月であり、同時期に司馬が『新選組血風録』を連載中(小説中央公論)で昭和三十七(一九六二)年五月〜翌年十二月まで)だったことも傍証たりうるだろう。(なお、前述のとおり『燃えよ剣』の『週刊文春』連載は昭和三十八(一九六三)年十一月〜翌年三月まで)。

三、三島由紀夫と新選組——餅焼きの比喻

三島が昭和三十五(一九六〇)年、永井尚志の七十年忌に出席していたことは前述したが、同じようなふるまいとして、昭和四十三(一九六八)年四月二十五日、板橋墓所(寿徳寺境外墓地)でおこなわれた近藤勇の百年忌に献花をしている(21)。板橋にあるこの墓は、維新後も存命していた新選組の旧幹部・永倉新八がこの地(正しくはその近辺)で斬首された近藤の追悼のため建立したもので、墓碑正面は近藤勇と土方歳三の連名、側面には没した隊士たちの名が刻まれている(ちなみに、三島が司馬遼太郎への好評価を書簡で伝えた安岡正篤の祖父にあたる・安岡良亮——土佐藩士、維新後は熊本県令などを務める。ただし正篤は良亮の婿養子・盛治の婿養子なので、血縁的にはかなり離れている——は近藤の斬首を命じた人物である。三島がこの史実を知っていたか否かは定かでないが、偶然にしても興味深い)。永井尚志との関わりもあるだろうが、それを度外視しても、三島が近藤勇および新選組に対し密かに肯定的な感情を抱いていたとはいえるだろう。

前述のように、三島が新選組について公に記述した創作作品はなく、前掲の映画評『残酷美について』における僅かな言及しかない。司馬遼太郎についても前掲安岡正

篤への書簡以外皆無である。しかし三島は、明言はないものの、司馬が描いた新選組作品からの影響が読みとれる一文を残している。法律の専門雑誌「法学セミナー」に掲載された「法律と餅焼き」というエッセイである。ここで三島は法律を語るさいの比喩として、火鉢で炭火をおこし網（＝餅網）で餅を焼く、というかつての日本でおこなわれていた作業を用いている。

さて、法律とはこの餅網なのだらうと思ふ。餅は、人間、人間の生活、人間の文化等を象徴し、炭火は、人間のエネルギー源としての、超人間的なデモニーニッシュな衝動のプールである潜在意識の世界を象徴してゐる。（中略）

人間の餅は、この危険な炭火の力によつて、喰へるもの、すなはち社会的に有益なものになる。しかし、もし火に直接触れれば、喰へないもの、すなはち社会的に無益有害なものになる。だから、餅と火のあいだにあつて、その相干渉する力を適当に規制し、餅をほどよい焼き加減にするために、餅網が必要になるのである。

たとえば殺人を犯す人間は、黒焦げになつた餅である。そもそもそついで人間を出さないやうに餅網が存在しているのだが、網のやぶれから、時として、餅が火に落ちるのはやむをえない。そついでときは、餅網は餅が黒焦げになるに委せる他はない。すなはち彼を死刑に処する。

（三島由紀夫「法律と餅焼き」〈法学セミナー〉昭和四十二（一九六六年四月号）（22））
このあと、三島は餅網＝法律を時折すり抜けて少々焦げた妙味をもつ《妙な餅》としての芸術について述べていく。

特に法律専門雑誌という媒体では突飛な比喩であるが、司馬遼太郎はこれに先立つ形で、同様の比喩表現を前述の連作短編集『新選組血風録』（小説中央公論）連載は昭和二十七（一九六二）年五月、昭和三十八（一九六三）年十二月の中の「鴨川銭取橋」（昭和二十七（一九六二）年九月）でおこなっている。副長の土方歳三——この連作短編はすべて土方が視点人物となっている——が、監察方（内外の諜報、隊内の風紀取締などを担当する部署、司馬は『旧軍部の憲兵』にたとえている）の山崎蒸に内偵を命じるさい、火鉢を用いた「餅焼き」による演出が効果的に用いられる。

「狗野が死んだそうだな」

土方は火鉢に金網をのせて餅を焼いている。くろり、と餅をひっくり返してから、

「君（引用者注＝山崎）はどうする」

「現場へ行かないのか」

（中略）

土方は餅を箸でつまみあげて、あんた手を出しな、といった。餅をくれるのかと思つて箸をさしたすと、土方は笑いもせず、「餅は私が食う。この一件に手を出してみろというのだ」

（司馬遼太郎「鴨川銭取橋」昭和二十七（一九六二）年九月（23））

隊士である狗野暗殺が、幹部隊士である武田観柳斎の脱退計画（史実でも薩摩藩に寝返ろうとしていたという説が有力で、本作もそれに沿っている）と関わっていることがやがて明らかになる。薩摩藩邸に出入りしつつ新選組の密偵を務める餅屋治兵衛（ここでも「餅」が強調されている）などとも連携し、山崎は武田の目論見を掴んでいく。

土方は、今日も餅を焼いている。

「先生」

と、山崎はいった。

「……………」

土方は火桶に顔を伏せ、炭火をしきりと吹きつつづけていた。この男は、餅を食うより、それをどう巧緻に炙るかというこのほうに興味があるらしかった。

「薩摩？」

土方は、顔をあげた。

「やはり、そうか」

この男も、狗野の斬り口の報告をきいたときから、下手人は薩摩ではないか、と考えていたらしい。

「餅はどうだ」

と、箸でつまみあげた。今日はどういふ風むきか、餅を炙れるらしい。

山崎は、掌にのせた。が、副長の前で食うわけにはいかない。

「いいよ、食ってくれ。おれがさきほどから丹精して焼きあげたものだ」

（鴨川銭取橋）

このあと、隊による武田の処断＝斬殺を淡々と描き、小説はおわる。この短編で土方がおこなっているのはひたすら餅を焼きつつ内偵を命じ結果を確認することだけなのだが、厳格な規律＝法度でもって極端ともいえる「武士道」を全うしようとした新選組の裏面的な運営者・土方歳三の凄味が伝わる。（*ちなみに、新選組の規律は「局

中法度」という呼称が子母澤寛の新選組研究書以降定着し、司馬も用いているが、近年この呼称は子母澤の創作であるという説が有力である。ただし、これに相当する禁令のようなものが存在したことは、前述した生き残り幹部である永倉新八が証言している(24)。

三島がこの短編を読んでいたか否かはむろん確定できない。だがそれを度外視しても、先の「法律と餅焼き」をこの司馬の短編の解釈コードとして用いると、土方が念入りにおこなっているのが法度(法)による処断の段取りや円滑な実行であり、餅焼き作業はその比喩であることがより鮮明になる。上記エッセイで三島が「死刑」に触れている点も、奇妙な符号を示している。いふなれば三島の「法律と餅焼き」は、司馬の「鴨川銭取橋」評としてきわめて優れているのである。法度により処断される武田観柳斎が三島のいう「黒焦げになった餅」だとすれば、優秀な「監察方」である山崎蒸は餅網に最も馴染んだ《喰へる》餅ということになるだろう。

拙者、関東発足之時々より忠天朝三奉シ躬ハ幕府致シ候者素より僕志願候

近藤勇書簡(萩原多賀次郎宛)——文久三(一八六三)年六月(推定)(25)

この近藤勇の故郷宛て書簡にみられる、「忠」は天朝、「躬(身)」は幕府、という件りが興味深い。前述したように、江戸時代末期においては、特に倒幕勢力に属していなくとも志をもつて国事にあたる近藤のような人間——いわゆる志士にとって、尊皇思想が常識ようになっていたことが窺える(付言すれば、この時期から急速に「志士言葉」として定着してゆく「僕」が用いられているのも興味深い)。三島由紀夫が、祖先である永井尚志と縁浅からぬ近藤勇のこの書簡を知っていたら、そして、文芸作家としての司馬遼太郎の地盤が大衆小説分野でなかったら、ひいては、純文学と大衆文学の区分に優劣の意識がなかったら、新選組への共感をもっと明らかにしたかもしれない。関連する実話だが、三島はその晩年、漫画『あしたのジョー』(原作||高森朝雄(梶原一騎の別名)、作画||ちばてつや「週刊少年マガジン」連載は昭和四十二(一九六七)年十二月〜昭和四十八(一九七三)年四月)を熱心に愛読していたという(26)が、存命中そのことを公言することはなかった。若者がボクシングの世界で生命を燃焼し尽くすこの作品への三島の共感は、いうまでもなく新選組への密かな共感と同質のものであるに違いない。

また、保守系運動家出身の思想家・鈴木邦男によれば、三島と共に割腹自決した森田必勝(当時鈴木と同じ早稲田大学に学んでいた)は《竜馬派》だらけの大学で一人

だけ反対する学生》であり、《皆、竜馬、竜馬って言うけど、俺は土方歳三の方が好きだな》と言い、新選組は勤王の志士を捕縛殺害していたという批判——が出るのは特に民族派系統の保守思想をもつ学生の集まりだからであろう——に対し《いえ、違います。京で新選組は天皇を守るために闘ったのです》と反論し、《それに新選組には美学があります。勝ち誇って贅沢し、随落した薩長のお偉方とは違います。函館まで行って闘い死んだ土方歳三なんて男の鑑じやないですか》(中略)「鈴木さんも子母澤寛の『新選組始末記』や司馬遼太郎の『燃えよ剣』を読んで下さいよ》と言ったという(27)。坂本竜馬(龍馬)よりも土方歳三、という森田の比較には司馬の「竜馬がゆく『燃えよ剣』」からの影響が明らかだが(後述するように両作は同時期に書かれている)、この森田を同志として信頼していた三島であれば、同様の話を聞いていたことは十分に考えられ、その意味でこの鈴木証言は貴重である。

それだけに、本論でみた「法律と餅焼き」から推測される、司馬作品からの密かな影響と、そして奇妙な秘匿は、芸術諸分野の序列意識や、左右両翼をはじめとする思想的立場から派生する枝葉のイメージから来る棲み分け意識——より具体的にいえば不毛きわまる「敵」「味方」意識——の反映の強さを痛感させる。三島晩年における文学界(特に純文学の分野)からの孤立との通底もつかえ、興味深い。

四、「燃えよ剣」の両義性——司馬遼太郎の葛藤

前掲松本による、司馬遼太郎が武士的美意識に裏打ちされたロマン主義的人間像の追及・描出を封印するようになるきっかけの一つが三島由紀夫の自死だったという考察には論者(徳水)も異論がない。しかし、そもそも司馬は三島の自死以前から、土方歳三や河井継之助のような武士像を「封印」すべく作品化していたようにも思える。

(おれの名は、悪名として残る。やりすぎた者の名は、すべて悪名として人々のなかに生きるものだ)

歳三は、もはや自分を、なま身の人間ではなく劇中の人物として観察する余裕がうまれば始めている。

いや余裕というのではなく、いま過去を観察している歳三は、歳三のなかからあらたに誕生した別の人物かもしれない。

(司馬遼太郎『燃えよ剣』——「官軍上陸」)

本論でも前述し、前掲松本・山内ほか多くの論者が指摘していることであるが、司馬は土方歳三を描く『燃え上剣』を書くかたわらで坂本龍馬を描く『龍馬がゆく』を書いていた。『燃え上剣』における土方像が、武士的美意識を完遂して死んでいくように描かれる一方で戦闘者としての合理性を備えていることは前述したが、司馬の描く龍馬の合理性は土方と部分的に共有されつつもやはりはるかに印象強く、西欧文化への好意的関心にみられる開明性、進取の気性や、龍馬暗殺犯について『暗殺者』という思慮と情熱の変形した政治的痴呆者のむれをいかに詳しく書いたところで、龍馬とはなんの縁もない』と描写している『龍馬がゆく』——『近江路』(28)——ことなど、両作の主題や人物像はやはり真反対といつていい。この矛盾の底流には、司馬遼太郎の根深い葛藤があると論者(徳永)は考えている。

司馬は近代日本における陸軍を土着的な「文化」、海軍をグローバルな「文明」としてほぼ分別し、後者における合理性や開明性のほうを好評価している(29)。前者に対する感情はつきり嫌悪であることは、自身の陸軍戦車部隊での経験談——民間人を撃殺しても作戦を実行せよ、と大本営の参謀に言われたと述べている(前掲『朝日ジャーナル』(30)——ことなど——や、前述した二・二六事件への批判でも明白である。一方、特に日露戦争以前の海軍に対しては好意的といつていい描出や発言がみとめられる。

司馬にとっては、近代日本海軍の源流の一つとしての坂本「龍馬」像があつたのだらう。では同時期に描いていた土方歳三は司馬にとってどのような存在だったのだろうか。論者(徳永)は、近代日本陸軍の源流ではむろんなく、陸軍軍人だった自分にとっての理想を託していたのではないだろうかと考えている。(ちなみに、『龍馬がゆく』で「龍馬」の表記を変えていることよりもさらに明確な虚構として、『燃え上剣』の土方は池田屋事件の端緒となる古高俊太郎の拷問をおこなわない。これは永倉新八が証言している史実なのだが——当然司馬は永倉の証言を読んでいたはずである——、司馬は望ましい武士像としての土方を描出すべく、これを削除したのだらう。)

このように考えるとき、『燃え上剣』という、のちに多くの模倣やパロディを生む優れた題名には、「燃え上がれ」——肯定的な意味と、「燃え尽きてしまえ」——否定的な意味が併せ込められているのではないかと思えてくる。司馬はここに、日本史における武士という奇妙な人種への愛と憎を込めたのだらう。だとすれば、三島の自死以降うかがえる武士像追及・描出の封印も、もともと司馬の中に胚胎していたといえるので

はないだろうか。このように考えると、三島の自決に接した司馬の反応の矯激さは、共感を抑制するための反作用のようなものではなかったかと思えるのである。

五、村上春樹の新選組描写、三島由紀夫と「明治武士道」

以前論者は、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』(第一部「新潮」連載は平成四(一九九二)年十月、翌年八月)の初稿——正しくは「新潮」誌掲載時と最初の単行本——における、主人公・岡田亨が『二丁目二十六番地』(第二部第一章)に住んでおり且つ先祖に『明治維新の折りに、日本の行く末を憂えてどこかの寺の玄関で腹を切つて死んだ』(『新撰組の一員』(第一部第四章)がいたという設定が、最初の文庫化以降は「新撰組」の部分だけ削除されていることについて論じたことがある(31)。村上の先行作品『羊をめぐる冒険』(昭和五十七(一九八二)年)では、三島由紀夫と二・二六事件の関連が主人公たちに累を及ぼすという展開があり、これを引き継ぐような設定だったと考えられる。

この削除に論者(徳永)が気づいた当初、村上は上記『ねじまき鳥クロニクル』初稿当時「苛烈な戦闘集団」「賊軍」というイメージで二・二六事件と新選組を結び付けたものの、天皇信仰の有無もしくは強弱——新選組にも天皇信仰はあつたことは前述の通り。村上がそれを認識していたか否かは不明だが、いずれにせよ天皇信仰の「見えやすさ」「見えにくさ」が実際にあるのは間違いない——を再考し、削除したのではないかと考えていた。だがこの論考を通じ、『ねじまき鳥クロニクル』における夫婦の共闘という要素と、三島が二・二六事件に材をとった『愛国』における夫婦の中心に共通点がみられることに気づき、新選組には夫婦・恋人との繋がりが希薄(虚実様々なエピソードはあつても確定的なそれがない)であることから、新選組のほうだけを削除したという解釈もできると述べた。

だが、新選組と二・二六事件の青年将校たちが、たんなるイメージだけでなく基本的な思想動向(武士道、天皇信仰)や賊軍となる成り行きをほぼ共有していることは間違いないので、上記村上の初稿削除はおこなわれなくても問題はなかったとも考えている。本論で考察したいいくつかの事例から推察できるように、三島由紀夫も新選組に対し、二・二六事件の青年将校たちに通ずるようなイメージを密かに抱いていたのかもしれない(その意味で、『羊をめぐる冒険』から『ねじまき鳥クロニクル』初稿へ

の流れはいわば「的(まと)」を射ている。大日本帝国陸軍の軍服をデフォルメしたような「楯の会」制服は「おもちゃの兵隊」と揶揄されたが、新選組の隊服も『忠臣蔵』の衣装を基にした「だんだら染め」で、芝居がかつていてという意味で酷似している(なお、この新選組の隊服はすぐ着用されなくなつたらしい)。加えて、市ヶ谷事件のさい三島が手にしていたのは日本刀だったことは、二・二六事件よりも新選組に寄り添っているといつてもいい。

洋服の軍服に日本刀という取り合わせは幕末以降のもので、当然本来の武士の出で立ちではない。菅野覚明は『武士道の逆襲』で、日本人が「武士道」を強く意識し内外にその価値を発信し始めるのは武士の時代が終焉したのちの明治時代以降で、「明治武士道」と呼ぶべきもの——たとえば武士の忠義は個々の身近な「おらが殿様」に対するものが本来だが、明治武士道においては将官から一兵卒にいたるまで忠義が天皇⇨大元帥に一極集中する。乃木希典による明治天皇への殉死は、前者と後者が奇妙な形で合わさった端的な事例である——が現在流布する「武士道」イメージの原型であると述べている(32)。卓見といえよう。近代兵器の発達が加速的に進んだこの時代にあつて、戦争の実相も本来的な「武士道」と共存しがたい、むしろ矛盾するようなものになつていったことは明らかであり、この國が第二次大戦によつて一度滅んだことの遠因ともいえる。(ちなみに三島由紀夫は日本に根付いていた「武士道」と明治以降西欧から輸入された「軍国主義」とを区別するさい、乃木希典の明治天皇への殉死を前者にのみ属する最後の事例としており(「武士道と軍国主義」(33))——ほかに三島の乃木言及は数多い——、菅野が指摘する明治武士道の複合的性格を見落としていくことが分かる。)

新選組が「だんだら染め」の隊服を捨てたのは、羞恥心もあつただろうが、隠密行動に不適であるという本質的な目的もあつたであろう。司馬が『燃えよ剣』で史実に沿い強調しているが、晩年の土方歳三は刀槍よりも銃火器を重視し、近代戦闘の指揮者としても有能ぶりを発揮したという(なお、ここに前掲近藤勇の尊皇思想を合わせれば、「明治武士道」の原型のよまんなものにならぬ)。三島が新選組に密かな親近感を抱いた時この意外なほどの合理性を見逃しあるいは軽視していただろうことは、三島が武士道や武術に関して書き残したものからも知れる。このように考えると、司馬が違和感を覚えた三島の「武士道」は、武士の実相と離れた最後期「明治武士道」の亡霊のようなものというほかになく、痛ましい。

*本文中のテキスト引用(単語以外)は《》で括った。

〔注〕

- (1) 「異常な三島事件に接して——文学論的なその死」(『毎日新聞』、昭和四十五(一九七〇)年一月二十六日)新潮社『司馬遼太郎が考えたこと』、平成十四(二〇〇二)年二月
- (2) 「二・二六事件と私」(河出書房新社『英霊の声』、昭和四十一(一九六六)年六月)新潮社『決定版 三島由紀夫全集』4、平成十五(二〇〇三)年九月
- (3) 「あどがき」(講談社『三島由紀夫短編全集』6、昭和四十一(一九六七)年)新潮社『決定版 三島由紀夫全集』3、平成十五(二〇〇三)年八月
- (4) 「花さかりの森・愛國」(新潮文庫『花さかりの森・愛國』、昭和四十三(一九六八)年九月)新潮社『決定版 三島由紀夫全集』5、平成十五(二〇〇三)年十月
- (5) 松本健一『三島由紀夫と司馬遼太郎』『美しい日本』をめぐる激突』平成二十二(二〇一〇)年十月
- (6) 山内由紀人『三島由紀夫 vs 司馬遼太郎』平成二十三(二〇一〇)年七月、河出書房新社。また、さらに近年の比較考察では、福嶋亮大『司馬遼太郎と三島由紀夫「国民作家」の戦争体験』(『文藝春秋』2011年秋号)平成二十七(二〇一五年)八月があり、両者の「思想」ならびに「国民国家への不信を指摘している」。
- (7) 「われら」からの遁走(講談社『われらの文学』三島由紀夫、昭和四十一(一九六六)年三月)新潮社『決定版 三島由紀夫全集』4、平成十五(二〇〇三)年九月
- (8) 「朝日ジャーナル」(昭和四十六年一月一日合併号、朝日新聞社)
- (9) 「安岡正篤宛 昭和四十二年五月二十六日(封書)」(新潮社『決定版 三島由紀夫全集補巻』、平成十七(二〇〇五)年七月)
- (10) 『定本三島由紀夫書誌』(昭和四十七(一九七二)年一月、藤沢十字社) / 安岡の著作の発行年・出版社は以下。『王陽明研究(新版)』(昭和三十五(一九六〇)年三月、明徳出版社)、『興亡秘話』(明徳出版社、昭和三十三年(一九五八)年一月)、『鑑賞』(古今に学々——日本の盛衰)(全国師友協会、昭和四十三(一九六八)年六月)
- (11) 「革命哲学としての陽明学」(文藝春秋社『曙君』、昭和四十五(一九六九)年九月)新潮社『決

- 定版 三島由紀夫全集36』平成十五(二〇〇三)年十一月
- (12) 『森馬』(新潮社)『新潮』昭和四十二(一九六七)年二月号、翌年八月号、新潮社『決定版 三島由紀夫全集13』平成十三(二〇〇二)年十一月
- (13) 『燃えよ剣』昭和三十九(一九六四)年三月、文藝春秋新社、『燃えよ剣 完結編』昭和三十九(一九六四)年五月、文藝春秋新社。ほか、文庫版 昭和四十七(一九七二)年、新潮社、Kindle版 平成二六(二〇一四)年、文春books も参照
- (14) 『銅像との対話—西郷隆盛』(産経新聞)昭和四十三(一九六八)年四月二十三日、『決定版 三島由紀夫全集34』平成十五(二〇〇三)年九月
- (15) 『残酷美について』(映画芸術)昭和三十(一九六五)年八月、新潮社『決定版 三島由紀夫全集32』平成十五(二〇〇三)年七月
- (16) 『峠』(毎日新聞)昭和四十一(一九六六)年十一月十七日、昭和四十三(一九六八)年五月十八日、新潮社『峠』昭和四十三(一九六八)年十月ほか、文庫版 昭和五十一(一九七五)年五月、Kindle版 新潮社、平成二七(二〇一五年)も参照
- (17) 『林房雄宛 昭和四十四年六月十三日(封書)』新潮社『決定版 三島由紀夫全集38』平成十六(二〇〇四)年二月
- (18) 安藤武『三島由紀夫「日録」』平成八(一九九六)年四月、未知谷
- (19) 前掲『決定版 三島由紀夫全集38』(前掲注17)
- (20) 前掲『定本三島由紀夫書誌』(前掲注10)
- (21) 前掲安藤武『三島由紀夫「日録」』(前掲注18)
- (22) 『法律と餅焼き』(法学セミナー)昭和四十一(一九六六)年四月、新潮社『決定版 三島由紀夫全集34』平成十五(二〇〇三)年九月
- (23) 『鴨川銭取橋』(中央公論社)『小説中央公論』昭和三十七(一九六二)年九月、中央公論社『新選組血風録』昭和三十九(一九六四)年四月ほか、文庫版 角川書店 昭和四十二(一九六七年)、Kindle版 底本は中央公論社、平成十六(二〇〇四)年八月、も参照
- (24) 水倉新八『新選組 水倉新八』(『新選組頭末記』昭和四十三(一九六八)年十月、新人物往來社)平成二九(二〇一七)年十一月、角川新書
- (25) 近藤勇書簡 萩原多賀次郎他宛 文久三(一八六三)年六月(推定) (原本は町田市小島資料館蔵)『新選組史料集』新人物往來社、平成五(一九九三)年九月、小平図書館ホームページ『五と新選組』も参照 <https://library.kodaira.ed.jp/reference/shinsengumi.html> 平成三十一(二〇一九)年一月十九日閲覧

- (26) 夏目房之介『マンガの深読み、大人読み』(平成十六(二〇〇四)年、イースト・プレス)によると、昭和四十四(一九六九)年頃、深夜に講談社『少年マガジン』編集部を訪れた三島由紀夫が、『あしたのジョー』を楽しみに読んでいたことがこの週刊の『少年マガジン』を買ったので売って欲しいと頼んだという。ちなみに三島は『社会料理三島亭』(夫人俱樂部)昭和三十五(一九六〇)年一月、十一月、『決定版 三島由紀夫全集31』平成十五(二〇〇三年六月)や『劇画における若者論』(サンデー毎日)昭和四十五(一九七〇)年一月一日、『決定版 三島由紀夫全集36』平成十五(二〇〇三年十一月)で手塚治虫、水木しげる、赤塚不二夫などの作品を批評している。後者の評論では『争つと以前から劇画に親しんで』いるとした上で、『赤塚の破壊的なナセンスや破壊主義を賞賛しているのだが、それでも権力客観的な立場からの批評という感じが強い。加えて、『劇画』を論じて上記のような珍談の処処に『あしたのジョー』を取り上げないこと自体が、三島の遠慮や表現ジャンルへの序列意識を物語る。
- (27) 鈴木邦男『三島由紀夫と野村秋介の軌跡』(第一、二回)土方盛三に傾倒した右翼の学生、新選組再評価で俾はれる在りし日の『楯の会 森田必勝の面影』(月刊タイムズ社)『月刊Times』平成二十七(二〇一五)年七月号
- (28) 司馬遼太郎『雷馬がゆく』(産経新聞)昭和三十七(一九六二)年六月一日、昭和四十一(一九六六)年五月十九日、文藝春秋社単行本 昭和三十(一九六五)年七月、昭和四十二(一九六六)年八月、ほか、文庫版 文春文庫、昭和五十年(一九七五年六月、九月)、Kindle版 文藝春秋社、平成二六(二〇一四年十一月)も参照
- (29) 『司馬遼太郎が語る日本』(一九九六年六月、朝日新聞社)ほか
- (30) 前掲『朝日ジャーナル』(前掲注8)
- (31) 拙稿『おじまき鳥クロニクル』改稿に関する一考察—新撰組、二・二六事件、三島由紀夫夏目漱石をめぐる—(『解釈』六十巻一・二月号、六七六集、平成二〇(二〇一四年)二月)なお、新撰組、新撰組における「選」「撰」は幕末の当事者たちからして双方を用いており、どちらが正しいとはいえない。本論では基本的に「選」を用いている。
- (32) 菅野覚明『武士道の遊戯』(平成十六(二〇〇四年)、講談社現代新書)
- (33) 『武士道と軍国主義』(叢書社『LAWBOY』)昭和五十三(一九七八)年八月、『決定版 三島由紀夫全集36』平成十五(二〇〇三年十一月) これは当時の保利茂官房長官の求めに応じ後述したものを内閣用箋にタイプ印刷したもので、三島はこれが閣僚会議に提出されることを期待していたが果たせず、昭和四十五(一九七〇)年八月十日付速達便で自衛隊調査学校教官の山本勝勝に送付したものである。三島の死後に山本が『LAWBOY』誌上で公開した(上記全集解説による)。